

一緒に遊ぼう！

障害の有無に関係なく 子どもたちとともに遊ぶ 余暇支援の取組

——できることを、できる範囲で行う、

ファッション感覚ボランティアのススメ

『アナと雪の女王』を見て

今年、メガヒット映画として話題の『アナと雪の女王』。魔法が使える女王エルサと妹アナを中心に進む物語ですが、この映画は、私の行っている活動に通じるものを感じました。

まだ見ていない人のためにも、あらすじは記載しませんが、周囲の人間は使うことのできない魔法を使えるエルサという存在が、映画の中で、マイノリティ（＝個性とも言える）な存在として描かれ、最後は「真実の愛」で共に生きる方向へ…。

「一緒に遊ぼう！」という子ども時代のエ

ルサとアナ。魔法が原因で遊ぶことができなくなった2人。この状況は、障害があるために、友だちと一緒に遊ぶことができない障害児の状況に似ていませんか。

現実に、地域では同様の事例が溢れています。映画のように、ハッピーエンドになるかわかりませんが、このような課題に対して、私たちが行っている取組をご紹介します。

「一緒に遊ぼう！」

毎月2回、いつもの場所に、知的障害や発達障害のある子どもたちやきょうだい児が集まります。

迎えるのは、障害児支援の専門家とはほ



阿部 友輝

障害児余暇支援団体「えいぶる・ねっと」代表
大分県福祉保健部地域福祉推進室

【あべ ゆうき】1981年、大分県大分市生まれ。2001年、大分県庁入庁。その後、県庁内外（県内市役所等）で福祉行政を中心に従事し、現職。2011年に「えいぶる・ねっと」を立ち上げ。趣味は卓球と自転車。

ど遠い現役公務員や主婦、大学生などのボランティアです。

集まるのは、朝の10時。そこから13時までを基本として、「遊び」をテーマにした活動を平成24年から行っています。

時間は30分単位に区切り、音楽・運動・工作・パソコンなどの内容を盛り込んでいきます。子どもたちの集中力の持続や興味の違いから、30分程度でいろんなことをしようという趣旨です。とは言っても、とにかく子どもたちがパワフルで、私たち大人が30分くらいで休憩しないと3時間もたないというのが実情です（笑）。

子どもたちの活動中の飲み物は、私たちが準備しています。その理由は、飲み物を



買う練習を行うためです。参加する子どもたちは朝の受付でおもちゃのお金を千円分毎回受け取り、飲み物と昼食の弁当は、自分で選び、自分で買います。

この「お金を使う練習」は、障害児がいる親との話し合いでやってみることに決まりました。「なかなか買い物に連れて行けない」、あるいは「買い物に行っても、子どものペースに合わせられない」という方が多く、せつかくの成長のチャンスだからできる形でやってみようとしたものです。

また、私の住む大分県は、車社会です。そのため家族の買い物など多くの方が自家用車を利用するのですが、それが足かせとなつて子どもたちが公共交通機関を利用する機会がありません。「大人になった時のことを考えると、子どもの時から、バスに乗る練習ができるといいなあ」と考え、私たちの活動日は「バスに乗って会場まで来る練習」にもしています。こうやって聞くと、「すごいプログラム」という感じがするかもしれませんが、実際は子どもと一緒にバスに乗って一緒に降りるだけです（笑）。

このことは、たったそれだけのことでも、なかなか時間を取ることができない、あるいは他の人たちに迷惑をかけてしまうと思つて、子どもと一緒にバスに乗る時間を取っていない親が多いという実情を踏まえたものです。

「えいぶる・ねつと」の始まり

私たちの活動の発端は、4年前の平成22年8月にさかのぼります。

元々、障害のある子どものスポーツ活動に関わるボランティアをしていた私は、「子どもたちが休日に行く場所がない」という声をよく耳にしていました。「何かできないかなあ」と思つて知人らに声をかけ、そこで集まった15人で話をしたのが最初でした。

集まってくれたのは、同じ大分県庁職員や障害福祉サービス関連で働いている方、障害のある子どもを持つ親、福祉と全く関わりのないサラリーマン、主婦、大学生など多様な方でした。

2時間半に及んだ話で導き出した結論は、「とにかく何かやってみよう」ということと、「やってみて、不評だったり、うまくいかなかった時は、気軽に辞めよう」ということでした。「えいぶる・ねつと」と名付けた余暇支援活動を実施するため、私たちは何度も話し合いを行いました。

そして、迎えた平成23年2月。障害のある子どもに実際に参加してもらい、プレ実施を行いました。このプレ実施の時のグダグダな感じは、今でも忘れません（笑）。子どもが来ただけで、慌てふためく大人たち。子どもそつちのだけで、次の活動の準備のためバタバタする大人たち…。

確かに、専門的な支援を行うデイサービス

などと同じ視点で見えてしまうと至らないところばかりに見える光景でしたが、その必死な姿と、子どもたちとの距離がだんだんと近くなつていく様はとても素晴らしいものでした。

「えいぶる・ねつと」という名前の意味は、2つあります。1つは「私たちのできる範囲で、できること（|| able）をしよう」でもう1つは「子どもたちのできること（|| do）を増やすお手伝いをしよう」という意味。この2つの要素が繋がる場（|| network）という願いを込めて「えいぶる・ねつと」という名前にしました。

それから丸3年が経過し、今では子どもたちはもちろん、大人も笑顔が絶えない場として月2回の活動を継続しています。

成長するのは子どもだけじゃない！

正式に始まった平成23年6月の第1回目に参加した大人のうち、2人の大学生の存在はとても重要だったと思います。

当時大学1年生だった彼ら（男子学生2人）は、まだ車を持っていなかったため、私の車で迎えに行き、会場まで連れて行きました。その車の中で言った大学生の一言。

「自分、ボランティアなんかしたことないんすよ。大丈夫すかね」

言葉は適切ではないかもしれませんが、図体も大きく、見た目もコワモテな男子学生が、不安そうな顔をしながらの発言。

そして参加した第1回目の活動。



8人の障害のある子どもやきょうだい児を迎えて、スタッフもバタバタしながらの中、大学生2人は子どもとペアで活動するわけですが、全く動きもなく、言葉もなく、動きが止まっていました。

この光景を見た時に、

「この先、なんとかなるのだろうか…」

と不安がよぎったところですが、活動終了後の反省会議で、彼らが、

「今日は、あまり子どもたちと話ができなかったけど、子どもたちから話しかけてきてくれて嬉しかったです」

と発言したのを聞いて、

「活動もまだ始まったばかり。一緒にがんばろう！」

と話したことを今でもはっきり覚えていきます。

会を重ねた現在では、彼らはなくてはならない存在になっています。

「A兄ちゃん！ A兄ちゃん！」と子どもたちが彼らの周りに集まります。彼らが用事であることができない時の、子どもたちの落ち込む様と比較すると、なんて楽しそうなんだと見ていて微笑ましくなる光景です。

彼らも大学4年になり、来年には社会人です。この活動を通じて、もちろんそれだけ

ではないでしょうが、子どもたちとの触れ合いや親との会話など、挙げればきりがないほど、彼らは成長しています。我々も含めて、成長するのは子どもだけじゃないということを感じ、大学生2人の将来も楽しみます。

外で遊ぼう！ 課外活動の実施

「えいぶる・ねっと」の活動の中では、年に2回の特別支援プログラムがあります。これは、夏休みや冬休み期間中に、外に出て思いっきり楽しもうという企画です。

夏には、大分県佐伯市にある「水辺の楽校」という施設に川遊びに行き、冬には、大分県九重町にある「九重森林公園スキー場」に行きます。

障害のある子どもを抱えた家庭では、買い物などに一緒に連れていくには一苦労で、子どもは留守番が多くなっているという現状があります。

自然体験は子どもが大きく成長する機会ですし、私たち自身が子ども時代に感じた自然体験の楽しさを「ぜひ、この子たちにも経験してほしい」との思いから、特別支援プログラムを行うことになりました。

とは言っても、なかなか簡単にはいかず、川遊びならではのリスク管理や子どもの行動を検討する試行錯誤が始まりました。

私が知人にその話をしたところ、「アウトドア体験を子どもたちに提供するボランティア団体に入っている人がいる」との情報

を得ました。その団体は小学生等を対象にしており、障害のある子どもへのアウトドア体験は提供したことがないものの、「一緒に川遊びをやりたい」と言っていたきました。これにより、私たちは普段通りに障害のある子どもたちと一緒に遊ぶ中で、その団体の方々が全体的な川遊びの内容を進めてくれるという、それぞれのできることを持ち寄る形で実施することになりました。

これこそまさに、「できること（＝do）をつなぐ（＝network）」という「えいぶる・ねっと」の極みだと感じた瞬間でした。

川遊びは無事成功に終わり、それ以来毎年開催しています。また、その団体の1人から「夏は川でボランティアをしているけど、冬は山でスキーやスノボのレンタルをしているから、冬は山においで！」と声を掛けてもらい、冬のスキーも決まったのです。

「遊ぶ」ということの難しさ

私たちは、この活動を通じて痛切に感じていることがあります。それは、「遊ぶ」とその難しさです。

私の世代から既にそうですが、「遊ぶ」となると、ゲームだとかインドアな物が多くなっています。そんな私たちが、障害のある子どもたちと遊ぶ時に「どうすれば皆が楽しめるかな」と考えるのは至難の業です。なぜかと言うと、私たちが子どもの頃に慣れ親しんできたゲームやインドアな遊びは、ルー



ルがしつかりと決められており、それを工夫する余地が失われている可能性があるからです。

別に、ゲームやインドアな遊びが悪いというのではなく、工夫して遊ぶ機会が減ってきたのではないかということだと思います。例えば「このたった一枚の新聞紙で、どうやって遊ぼう？」ということに頭を悩ませるのです。そうして思いついた遊びは、たいてい子どもたちにダメ出しされます(笑)。

しかし、こういったことを繰り返すうちに、私たちの活動にも少しずつ変化があり、「遊びを提供する(＝支援する)」というスタンスから、本当の意味で「一緒に遊ぶ」というスタンスに変わることができていると感じます。また、そうした考え方は、活動だけに特化したものではなく、「今ある材料」や「今の環境」をただ受け入れるのではなく、「こんな場合はどうだろう」と「こういう考え方もあるかな」という工夫を、少しずつ持つことのできる機会にもなっており、仕事や日常生活にも活かしているという実感があります。

活動を続けるという目標を立てない

私たちの活動を知っていただいた方々か

ら、よく言われるのが、「仕事もしているのに、すごいね。休みがないんじゃない？」という言葉です。とてもありがたい言葉だなあと感じる一方で、そのような大それたものではないことを、必ずお伝えしています。

現在のところ、私たちの活動は大分市内だけですが、他の市町村にお住まいの方から、「うちの近所でもこういった活動を始めたいけど、難しいですよね」というご相談も、ちらほらと受けるようになりました。

そんな時に必ず伝えていることが、「私たちは、ダメならいつでも辞めようと思っております」ということと、「できることだけしかやりませんから、難しくありませんよ」という2点です。実際、私は何の専門家でもなく、大分県庁の一事務職員です。そのため、「できることしかしていません」が、それがまさに活動を続けられる「コツ」なんだと思っています。

ボランティア活動は仕事ではありませんが、例えば「この活動を続けなきゃ」という思いが「義務感」に変わった経験がありませんか？ ボランティア活動をしていると、私も含めて必ず一度は抱く想いだと感じます。そのような時、私たちは、活動から一旦離れることをオススメしています。

だって、義務的にやっても楽しくないですよね？

「できることを、できる範囲で行うこと」が、私たちの考え方の原点であり、それ以上は考えても仕方ありません。私たちのできる範

囲で、私たちが楽しい活動を行う。これがまさにファッション感覚ボランティアだと思っています。

とにかくやってみよう！

そうは言っても、課題は山積みです。活動を始めて丸3年が経ち、子どもたちも大きく成長しています。そのため、毎回同じことを行っても、全く反応が違います。

一方で、私たち大人にも変化が出ており、ワタワタとすることもなく、子どもたちの変化を楽しむ空気感が出てきています。

「とにかくやってみよう」という思いが今の状況をつくったと思いますが、私たちは「とても良い活動ですよ。一緒にやりませんか？」という声を積極的には行っていません。

私たちの想いの根底にあるのは、このような「できること(＝job)」を皆でやろう(＝network)」という活動が、いろいろな場所であつたりいいなということです。そのため、私たちの活動の成り立ちや内容は、一切包み隠すことなく正直にお話した上で、広げていければいいなど日々話しているところです。とは言いながら、もちろん、人手は多ければ多いほど助かるので、お手伝いしていただけの方は大歓迎ですが(笑)。

最後に、お読みくださった皆さんの1人でも多くの方が、「何かやってみようかな」というきっかけになれば、幸いです。